

小さいときには自分の親はなんで周りの友達のお父さんのように「お医者さん」「サラリーマン」といった一つの仕事だけじゃないんだろう。とよく思ったものでした。文筆作業と大学教師の2足の草鞋の比重がどのようなものかわからず、そんなに無理して仕事しなくてもいいのになどと思ったものでした。

伊藤礼氏長女・伊藤礼子さん

父は色々な事に興味がある人でした。その為、様々な事を伝授されました。例えば、日曜大工。子供の時にミニカーで遊んでいると、そのミニカー用の車庫作りを教え込まれました。自分はそんな事はどうでもよくただ、ミニカーを動かして遊んでいたが逆らえなかった。当時は幼稚園生でしたが木を切り、釘を打ち、蝶番をつけて開閉する扉まで付けた覚えがあります。もちろんその時に私はトンカチとノコギリの使い方を覚えました。

伊藤礼氏長男・伊藤晃さん

僕らの速度が落ちたのではない。礼先生が速度を上げたのだ。礼先生は容赦のない人である。久我山の自宅から駅に向かう坂を降り切った交差点のところで追いついた。僕はほっとした。礼先生が速度を上げたのではなく、坂の傾斜で速度が上がったことが分かったからである。「コウシュウカイドウで行こう」横に並んだ僕に向かって礼先生が囁いた。コウシュウカイドウとは何ぞや？疑問を発する間もなく、僕の同意も無いままに、礼先生は激しい往來の車道の流れに飛び込んだ。正気かよ、と思ったが、遅れるわけにはいかない。見失っては断じてならぬ。僕は意を決してえいやっと車道に飛び込んだ。

伊藤礼氏教え子・田村高行さん「周辺」より

「疲れましたね」という話をしていたら、先生が自転車で走行中に心臓が止まった時の話をしてくださった。「三途の川を渡ったら本当にきれいなお花畑があるらしいよ」と何気なく口にされた。「そこでは懐かしい人達が迎えてくれているそうだよ」ともおっしゃった。「死後の世界はあるのかなあ？」と尋ねてくるので、私は不思議でもなんでもないので「先生、ありますよ」と答えた。

伊藤礼氏教え子・吉永正光さん「カンナ」より

彼はいつでも機嫌の良い声を出すことができた。

どこからその声が出てくるのか自分でも不思議だった。

伊藤礼「犬のいる風景」より

そもそも「面白い」というのはどういう事だ。お客が帰った後、私は辞書を引いてみた。某国語辞典である。これには「面白い」というのに次のような説明があった。

- 「①何か心に心が引かれ、続けて（進んで）してみたり、見たり聞いたりしたい様子だ。  
②普通とは変わった所が有り、続けて（進んで）味わったりつきあったりして、もっと内容を突き止めたい感じた。  
③おかしき事やうれしき事有つて、笑いが止まらない状態だ」
- 右のうち③はともかく、①と②はたしかに私が自転車に乗っているときの心情に合致していた。

伊藤礼「自転車」より

自転車ギョウギョウ、人生の道のり

# 伊藤礼追悼展

ユーモアと哲学を乗せろ。